

## 家政学部 健康栄養学科 小論文問題

次の文章は、毎日新聞に掲載された文章です。この文章を読んで、あなたの意見を800字以内で述べなさい。

月読 getsu-gi

ウナギの旅の終着点

専門記者 下桐 実雅子

科学研究の取材を通じて、生き物の不思議さや面白さを教わることは多い。その中でも印象に残っているのが、東京大名誉教授、塚本勝巳さんの話だ。

人呼んで「ウナギ博士」。船に乗り、二ホンウナギの生態を40年以上追いつけた。

二ホンウナギは謎が多い。海で生まれ、川で成長し、故郷の海に戻る回遊魚だが、どこで産卵するのか分かっていなかった。

塚本さんは2005年、グアム島などがあるマリアナ諸島西方の海で、二ホンウナギの赤ちゃんを大量に発見した。4年後には、念願だった卵も見つけた。

最初は細長い葉っぱのような形で海流に運ばれ、その後は稚魚のシラスウナギとなり、黒潮に乗って日本の川に泳ぎ着く。3000キロにも及ぶ壮大な旅だ。

川で黒っぽい成魚となり、再びマリアナの海に戻る。日本だけでなく東アジアに広く分布するが、産卵場所は1カ所しかない。

塚本さんはアユやサクラマスなどの回遊魚も研究したという。だが、二ホンウナギほど生態解明が手ごわく、魅力的な魚もいなかった、と振り返った。

ウナギは人工的に増やすのが非常に難しいことで知られる。商業ベースで卵から育てる技術が確立されておらず、天然の稚魚を取らないと養殖できないからだ。

二ホンウナギ、ヨーロッパウナギ、アメリカウナギは、いずれも絶滅危惧種に指定されている。減少要因には生育環境の悪化などもあるが、3種とも食用で、大量消費しているのは日本や中国だ。

二ホンウナギの稚魚は減り、日本の食卓はヨーロッパウナギを養殖した中国からの安価な輸入品が支えていた。だが、09年にワシントン条約で国際取引が規制されると、標的は北米や中米にいるアメリカウナギに移った。

世界自然保護基金（WWF）ジャパンと中央大がまとめた報告書がある。国内の小売店で昨年売られた約130点のかば焼きのDNAを調べたところ、「中国産」の半数以上がアメリカウナギだった。

カナダでは許可量を大幅に上回る稚魚が香港に輸出された。詳細な実態は不明だが、ハイチなど中米の国からも稚魚が中国に送られ、養殖されているとみられる。それが日本の店頭にも並び、このままでは「世界のウナギを食い尽くしている」と言われかねない。

「ウナギは大量消費に耐えられるような生き物ではない。特別な日のごちそうとして、国産の二ホンウナギを味わいたい」。土用の<sup>うし</sup>丑の日が近付くと、ウナギ博士のそんな言葉を思い出す。

2025年6月23日 毎日新聞朝刊